
出会いの4月 別れの3月

金城 ユウ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

出会いの4月 別れの3月

【コード】

N6338C

【作者名】

金城 ヨウ

【あらすじ】

先輩と出会えたおかげで私は変われました。でも、今日で先輩は
ないなくなる。私、先輩のことが大好きでした。ありがとう。そし
て、さようなら…… この作品には、前回（9/6）投稿した「9
月の海はくらげの海」の後日談が少しだけ含まれています。そちら
も読んでいただけるとうれしく思います。読まなくても障害とは
思いません。

「どうした？1年生」

「欲しいものはさ、自分で手を伸ばして掴まなくちゃ、何も手には
いないぞ」

出会いの4月。出会った時の貴方の言葉。貴方に会わなければ、
私の高校生活は、今とまったく違うものになっていたでしょう。

そして今日、貴方は卒業していく。別れの3月。

「高木先輩。こんなところにいたんですか。みんな待ってますよ」

私は、演劇部の部室に一人たたずむ人影に話しかけた。私の呼掛
けに、高木先輩はいつもの優しい微笑を返してくれる。その微笑に
一瞬だけトクンと心臓が跳ねた。

「先輩、何をしてるんですか？」

「うん。3年間、色々あったなと思ってさ」

何かを懐かしむような表情。でもこの顔を明日からは見れなくな
る。それが無性に寂しい。もう少し、もう少しでいいから、こうし
ていたい。

「先輩、私と初めて会ったときのこと覚えていますか？」

「勧誘したときだったかな？」

「違いますよ。その前にお昼を一緒にしています」

私は頬をふくらませる。その私に先輩は苦笑しつつ「そうだった
け？」と返す。

「そうです」

そう、あの日に貴方と出会った。だから私は変わったのだ。

「どつしよつ……」

私の目の前には、昼食のパン販売に群がる人ばかり。上級生だけではなく、先日入学したばかりの1年の同級生も果敢に人垣に突貫していく。

飢えたピラニアの群れのようで、なんか怖い。躊躇している私に優しい声がかげられた。

「どつした？一年生」

声をかけたのはやや細身の男子生徒だった。声と同じく優しくそうな顔をしている。ネクタイの色からすると2年生の先輩。

「あの…その…パンを」

人見知りする私は、緊張で上手く答えられない。

「ああ、あの人垣に躊躇しているということか」

でも、その人は私の短い返答だけで状況を理解してくれた。

「人がいなくなるのを待っていると、売り切れてしまうぞ」

「はい」

うつむく私に、その人は苦笑した。

「何が欲しいの？」

「えっと、メロンパンとチョココロネ」

私の返事に、なぜかまた笑顔のその人。

「良いチョイスするな。このメロンパンは美味しいぞ。ちょっと待っていて」

そう言い残し、その人は人垣を掻き分けて見えなくなってしまう。そして「おばちゃん。メロンパンとチョココロネをふたつずつ」と言う声の人垣の外まで聞こえてきた。すごい大きな声……

しばらくして人垣の中から出てきたその人が、笑顔で右手に持った袋を掲げた。

その後は、誘われて、校庭で昼食を一緒することになった。

普段の私では考えられないくらい、たくさん話を話した。

1 - B 西藤京子^{さいとうきょうこ}。他県からの入学でまだ友達もいないこと、本が読むことが好きで、たまにオリジナルの小説も書いたりしていること。まだ部活には入っていないことなど。

そして彼のことも聞いた。2 - A 高木和也^{たかきかずや}。趣味はオートバイでのツーリング、演劇部の副部長。そして読書家でもあることなどなど。

そんな中、友達がなかなかできないなどの悩みの相談までしてしまっていた。不思議と高木先輩の笑顔を見るとなんでも話せた。

「友達のことや、パンのこともなんだけど。待っていちゃダメだよ」「えっ?」

「欲しいものはさ、自分で手を伸ばして掴まなくちゃ、何も手にはいかないぞ」

「はい。がんばってみます」

少し緊張してそう答えた。だけど高木先輩は優しく微笑んで。

「自分でがんばって、ダメだったときには、いつでも訪ねておいで、力になるよ」

その微笑と言葉で、大きな安心感を得た気がした。

「そういえば、そんなこともあったね。京子ちゃんは、あの頃とは別人みたいだ」

感慨^{かんがい}深げに話す高木先輩。

「先輩の言葉を信じて、がんばりましたもん。ちゃんと自分の手を伸ばして友達も作って、演劇部にも入部しました。今では部長ですよ」

そう、あの言葉があったから、私は変わったのだと思う。

「そっか、がんばれよ部長」

「はい」

「そろそろ行かないとまずいかな？みんなも待っているだろうし」
高木先輩は出口に向かう。嫌、高木先輩行かないで、もう少しだけ……

「先輩！」

気が付いたら、私は高木先輩を呼び止めていた。

「なに？」

「先輩ごめんなさい。少し甘えさせてください。私、私、高木先輩のことが好きでした」

好きでした。過去形で話さなくてはいけないことが、とても悲しい。こんなこと言われても、先輩は困ると思う、迷惑だと思う、でも伝えずにはいられなかった。出会ったその日から胸の奥底にあったこの想いを、どうしても伝えずには……

「京子ちゃん、ありがとう。気持ちはずれしいけど」

しかし、私は先輩の言葉をさえぎった。

「言わないでください。わかっていません。三嶋佳奈みしまかなさんの事は知っています」

高木先輩に彼女ができた、ひとつづてに聞いたのは今年に入ってからだった。悲しかった、後悔もたくさんした、でも高木先輩と三嶋さんが並んで歩く姿は、とてもお似合いで、私の知らない笑顔の高木先輩も幸せそう……かなわらないな。って……

「私が、何もしなかった私が悪いです。欲しいものは、自分で手を伸ばして掴まなくちゃ、何も手にはいらない。先輩にそう言われていたのに……先輩の優しさに甘えて、私は何もしなかったから……」

先輩の顔を見れない。たぶん困った顔をしているだろう。そんな顔させたくないのに。

「先輩。三嶋さんを大切にしてください」

私は今できる限りの笑顔を高木先輩に向けた。でも笑っているのに、瞳から涙が頬を伝って滑り落ちる。

「あれ、なんでだろう？最後は笑顔で、さよならしようって、決めたのになんで？」

手で涙を拭うが、一度、堰を切った涙は止まらない。

「京子ちゃん、ありがとうな」

いつもの優しい声、そして、私の大好きな高木先輩の優しい微笑み。

「はい……先輩、ここでさよならです」

そう、ここで、高木先輩との思い出がたくさん詰まったこの部室で、さよならしよう。そして、この実らなかった恋からも、さよなら。先輩が出て行ったら、たぶん、いっぱい泣いてしまう。

「さよなら。京子ちゃん」

「はい……さよならです……和也先輩」

さよなら……私の初恋……

部室のドアを閉める。ドアが閉まる直前、京子ちゃんの泣き声が聞こえた。

廊下には、佳奈^{かな}が立っていた。

佳奈とは去年の9月に海に言って以来、微妙な関係が続いていたが、クリスマスイブに告白して付き合うことになった。センター試験直前に、何をやっているのかと思われそうだが、僕的にはセンター試験よりも大事なことだった。

OKしてくれたから良かったものの、ふられていたらセンター試験もどうなっていたか……今、考えると冷汗が出る。

「立ち聞き？」

「うん。結果的にね」

みんなが待っている校庭に向かう。佳奈も後を付いてくる。

「なんだか、妬けちゃった」

「……」

僕はそのことには答えずに歩く。

「いいの？放っておいて」

「大丈夫だよ。彼女は一人で立って歩ける強い娘だ」

僕の言葉に、佳奈は頬をふくらませる。

「やっぱり、妬ける」

「佳奈。海に行こうか。まだ寒いけど」

無性に海が見たくなかった。自分でもなぜかわからないが、良い事、

悪い事、何かあると海が見たくなる。佳奈からOKもらった日も、

佳奈と別れてから、夜明けの海を見るためバイクにまたがった。

「そうね。9月に行った海なら」

「いたずらっぽく笑う佳奈。」

「ああ。そうしよう」

僕も、少しだけ笑って見せた。

END

(後書き)

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

実は2〜3分程度の短い話を書く予定だったのに、書きあがったらいつもと同じ長さになってました。

転校してきたばかりの内気な少女が、出会った少年の言葉に勇気をもらい、友達になるべくクラスメートに話しかけるとい話話、「9月の海はくらげの海」とリンクさせよう。という電波を受信してしまったせいでこんな話になりました(笑)
ついでに文字数もいつもと同程度。

1000文字程度の物語が書けない著者でした(泣)

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6338c/>

出会いの4月 別れの3月

2009年3月24日11時11分発行